

成瀬仁蔵資料集1 (D266)

梅花女学校教師時代の覚え書

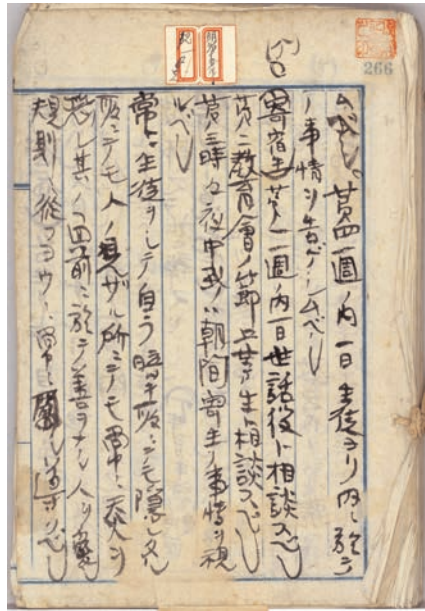
明治一五年

日本女子大学成瀬記念館

成瀬仁蔵資料集1 (D266)

梅花女学校教師時代の覚え書

明治一五年



凡例	iv
翻刻	1
解題	41

目次

【凡例】

- 一 本資料集は、日本女子大学成瀬記念館が収蔵する成瀬仁蔵の自筆史料（日記、手帳、ノート、メモ等）のうち資料番号D266を翻刻したものである。
- 二 原史料は縦書きの罫紙を二つ折りにしてこよりで綴じたもので、冒頭部分が欠落している。
- 三 翻刻にあたり、漢字は、人名以外は常用漢字のあるものはこれを使用し、異体字・変体仮名・合字は現行の用字に改めた。仮名遣い・当て字については原文通りとした。
- 四 誤字・脱字には「―」を付し推定できる文字を補うか「ママ」と記した。
- 五 抹消部分は削除することを原則としたが、残した方が適当と思われる箇所は、抹消線とともにそのまま記した。
- 六 判読不能箇所は、字数分の□で示した。

ムベシ。第四一週ノ内一日生徒ヨリ内ニ於テノ事情ヲ告ゲシムベシ

(5) ○

(寄宿生) 第一一週ノ内一日世話役ト相談スベシ

第二教育会ノ節上等生ト相談スベシ

第三時々夜中或ハ朝間寄〔宿〕生ノ事情ヲ視ルベシ

常ニ生徒ヲシテ自ラ暗キ所ニテモ隠レタル所ニテモ人ノ見ザル所ニテモ常ニ天父ヲ恐レ其ノ面前ニ於テ善ヲナシ人ヲ愛シ規則ニ従フヨウニ常ニ勵シ導クベシ

(6) ○

(問答会) 各生ヲシテ自ラノ品行ニ付テ考ヘシメ自ラ悟ラザルコトヲ問題トナシ各一問ヲ作ラシメ其ノ会ニ問ハシメ之ヲ生徒ヲシテ答ヘシメ若シ生徒答ヘ能ハザルコトハ教師之ヲ答弁スベシ。(一時ヨリ半時間但シ一週一度)

(7) ○

(寄宿ノ小兒ニ就テ) 小兒ヲ持スル娘ハ小兒ヲ己ノ子ノ如ク愛シ常ニ之ヲ勵シ之ヲ導キ之ガ手本トナリ常ニ母ニ代テ教育ヲ施スベシ然レバ己レ教育ノ実験ヲ得且ツ小兒ヲ善良ナル者トナスヲ得ベシ」之ヲ分配スルハ教師ト共ニ相談スベシ。」

(8)

(聖書) 毎朝ノ聖書ヲ暗記セシムルニ英語ヲ能スル者ハ英和ノ両語ヲ以テ暗記セシムベシ。而シテ其ノ意義ヲ言フトキハ當時己レノ実験ヲ其ノ節ニ合セテ言ハシムベシ。

(9)

(勸) 勸メ或ハ悪ヲ改メシムルニ或ハ励マスニ怒ヲ以テスルヨリ謙遜ト柔和ト愛ト熱心トヲ以テスベ

(12)

(歩行) 兵卒ハ行列ヲ為すハ一ハ支配する為め一ハ共ニ集リ一人或ハ二人或ハ遅れ或ハ進み過ること

(11) (10)

シ。人ハ種々ニ感ズル者即ち或ハ恐れ或ハ惡ミ或ハ好ミ或ハ愛シ或ハ怒リ或ハ慕フ等ナレドモ其ノ中尤モ感シ尤モ愉快尤モ力アル者ハ愛ナリ故ニ愛ヲ以テ万事ヲ勸メ励ます可シ。又責ムルモ何ノ益アラシヤ教師ノ務ハ其惡ヲ改メシムコトナリ故ニ其ノ為シ得る道を与へざる可らず譬ヘバ吾レコノ惡癖ヲ有シ之ヲ驅除セント欲すと雖ドモ或ハ人ニ責メラレ或ハ人ニ惡まるゝと雖ドモ其道ヲ知らずシラザズヲ捨ることを得ンヤ(但シ惡ヲ責メラル、コト即ち人ニ恥ルコト怒ラル、コト賤メラル、コト後^シゾケラル、コト或ハ神ヨリ未來ニ罰ヲ受ルコト等ニ由テ惡ヲ止ムル力ヲ得レバ生徒惡ヲナシテ止メザレバ之ヲ罰スベシ又望ヲ知ラシムベシ)故ニ先づ惡ヲ改メントスル心ヲ起さしめ次ニ其道ニ導くべし即ち人ニ由テ其法(適宜ノ)ヲ定メ行ふべし(而シテ己ノ過ヲ先づ驗スベシ)イエスガ只愛ヲ以テ吾ラヲ善ニ漸々導き勸メ賜フが如く生徒ヲ常ニ愛ヲ以テ導く可シ。一惡ヲ改ムル方第一神ノ御助ヲ受ルコト第二望ヲ持ツコト第三善ヲ感ズルコト第四習慣スルコト第五道理ヲ聞クコト等ナリ。又日々働き考へ戦フコトナリ

常ニ生徒ノ心ヲ察スルコト実ニ緊要ナリ。

子ノ教育ハ神ニ依頼シ其御聖靈ノ導き受けざれば決して能はず如何となれば家ヨリ會堂ニ行く途中ニ於ても其他一寸外ヲ見れば聞けば惡しき導に充てり故ニ之ノ目ト口ト耳其他誘を防ぐこと能はず然れば只聖靈のみ之ヲ能するなり故ニ真の教育ハ神ノ力ヲ受けることなり。故ニ吾等ハ學校を神ノ家となし常ニ子ノ為めに祈り且つ子ニ神の恵を祈ることをしゆべし。

なからしむ為めなり如是衆生歩行するトキ行列ヲ正シ嚴せうニなす可きなり

(13) (婦) ハ夫ニ従フベシ其教ヲ聞くべし

(14) (泣様ニ由テ子ノ心ヲ知ル) 怒リヲ以テ子を従はしむるより愛を以てなすべし若し怒ヲ以テセバ子ノ心ヲ怒ラセ親或ハ教師を惡む心ヲ発し且つ子ノ性質カンシヤクト成る然れば愛を以て勧め愛を以て罰せば子ノ心己れノ惡ヲ悲み善トナランコトヲ欲し且つ惡を惡み悔改メンコトヲ欲するニ至るべし譬ハバお榮ヲ罰するトキ怒れば怒リヲ発してカンシヤクシテ鳴き愛を以て罰せしトキハ惡ヲ悲みて鳴きし且つ後ちニ実ニ余ヲ愛する心顯われし故ニ親或ハ師なる者ハ子供ノ悲或ハ泣クコトヲ注意し其の有様ニ従ふて適當ノ教育を施すべし。

(15) (行状) 学則舎則ハ固ヨリ其他戸ノ開閉、器械ノ取扱、室内ノ整理、衣服身体ノ整、等ニ至る迄教師ノ命令ヲ背ク者ハ罰点ヲ其ノ年齢ト級ノ上下ト又其ノ違反ノ種類ニ応じて符し卒業証書ニ行状点モ符べし而して生徒ハ己れノ帳面ニ己れノ犯したる事ヲ記すべし。

(遊歩時間ノ注意) 遊歩時間或ハ其他ノ時間ニ泣ク者或ハ争スル者或ハ惡シキ言語ヲ咄ス者アルトキハ直ニ教師ニ告グベシ。是れ直ニ其惡ヲ矯メンガ為ナリ。而シテ寄宿生ノ中ニテモ若し長者ノ勸ヲ聞カズ罪犯ス者ハ教師ニ報ズベシ。

(点ヲ記ス方) 各組年長じたる者ヲシテ記せしむべし。

(子供ノ心) 小兒ノ心ハ大人ノ心ヨリ僅ノコトヲ感ジ易ク僅ノ親切ハ直ニ感ズベシ又僅ノ惡ミモ直ニ感ズベシ

(除惡道) 働きを多く与へ之ヲ勵し之を為を樂となさしむべし然れバ諸欲に勝ち争ノ暇なからしめ又惡しき話談する暇なからしむ

(縫裁時間) 二縫裁ニ付て教師ニ問ふ事と學課の問答ノ他談話するを禁すべし。

(敷ふとん) ヲ他処ニ持行き之を忘るゝものハ第十一條ノ罰点を符すべし

(勸メ) 教師或ハ長者タル者ハ常ニ生徒ヲ教ヘ導カざる可らず如何となれば吾曹大人ニしても一時一日ハ熱心之をなす也と決して之をなすともコノ力ハ永久せず直ニ消滅するものなりたとへば謙遜ノ如き一時ハ一生実ニキリストノ如く謙遜せんと決するも其力ハ一生永久せずもし永久せば一生過ハなきはずなり然れば一旦決したる事一旦悔ひし事も後又之を犯すことあり故ニ吾ラハ常ニ勵み常ニ進み常ニ注意し常ニ勸メラレて習慣となり大力とならざれば其点ニ達すること能はず故ニ吾ラハ常ニ自と聖書と天ノ神ニ教ヘられ勸めら「れ」勵されて日々進むことを得なりもし全からば教育ハ無用なり如是生徒も種々惡しき性質弱き生質を保つものなり固より惡しきものなり難しきものなり故ニ教育を要するなり即ち今日生徒ニ善行を勸めば當時之をなすを決し心熱すと雖ドモ直ニ消之さめて復タ元之有様ニ歸るものなり如何となれば未ダ心弱ければなり故ニ常ニ之ヲ呼起さざる可らずたとへば朝食事をなすも昼も食物を食さざるを得ざるか如し。仮し小兒でも草木でも今日食物を与へ直ニ消して跡を存せざるにはあらず漸々之ニ由て生長するものなり。又心ハ物或ハ草木の如きものニあらず、一旦心中ニ入りし事ハ再び心中ニ生じ彼れを奨励するものなり故ニ其再生ハ幾度も彼を奨励するなりまた一度勵ませし力ハ其心を強め漸々成長せし「む」るものなり故ニ屢々勵ます程其心を強くするものなり。故

ニ教師タル者長者タル者ハ一生働き一生戦ひし場処ニて一生勤むる為め強める為めニ働かざる可らず然れば毎日事々物々ニ付て生徒を勧め導き更ニ不怠不倦して日々ノ職分を尽ざる可らず故ニ諸生徒たちよ余ハ万事汝等の品行ニ目を注ぎ勧めるゆへ之を厭ふこと勿れ又長者よ汝等も毎日小女子を導くことを怠る勿れ故ニ小女子よ汝等教師老淑女長者ニ背ク勿れ従へヨ愛セヨ慕へヨ不然ざれば汝等一生幸ヲ得ることなし譬へバ眠度時外力ヲ受ケザレバ眠ヲ醒ますこ「と」能はざるが如し其醒すものを悪むこと勿れ是れ汝ノ幸ノ為めなり譬へば勉強ノ力ヲ与へ又火事ノ時ノ如き醒さざれば死ぬ可し。

明治十五年四月ヨリ

(聖書) 是前期ニ等し

(行状) ハ酒井氏ニ依頼し常ニ之を正しくす可し

(行状点) ハ期の末ニ至り十点を減ずべし然れば其期ハ別段嚴重ニすべし

○談話之事

○学校之器械の注意ト儉約

(他人之事を笑ふ事)

(一)

(課目)

心理学 一週 二度 310.5 ÷ 45 = 6.9

六枚九分或八七枚

北住春 要

(二) 智識
第一組

鈴木兼 要史

安田才 要

先 後

教育論 一週 二度

杉田真 要

家政 一週間 二度 家政已而教育

村田よし 要

代数 卷ノ三、四、一週 二度 95 ÷ 22 = 4.3 四枚強

文章 一週一度

談話 一週一度文章ヲ談スベシ

文明⁽⁴⁾文全

縫裁

当時廢止

漢学ハ専修科ニ於テ授ク可キト雖トモ当時未ダ天文、地質、及植物ノ三学ノ適當ナル訳書ノ乏キニ由
リ此ノ三学ハ英書ニテ授業シ其ノ代リニ漢学即チ外史及ヒ文章規範ヲ授ケ日本学科卒業トナス可シ。

第二組

弗氏生理書 前半 一日三枚宛

生理

村田よし

×文明史 全 家政

或ハ文

竹田徳

要

算術(開平開立迄) 未定

明史ハ

森田房

一日 要

如何

森田朝

一日 要

山口てる

(要)

山本清寿

要

○江頭

文章

平川千きを

一 伊藤珠

洋本 一 土屋政

楠岡きくよ

洋 一 大石睦世

ムツヨ
チ 一 橋平米

清水秀

洋 一 土倉とみ

第三組

弗氏生理書 前半

算術分数 三分ノ一中

書状

談話

第四組

万国地理 卷二、三、三枚宛

日本略史全

算術諸等数

作文

談話

習字 行書。

第五組

前神松枝

大井松枝

上代よし

北住梅

荒木ヤス

古木みつ〇

岡田米

館せい〇

読本ト万国史

村田高

読本六 後半

河村とら

万国地一、二、

池田春

算術四則。小数。

土岐幾の

習字楷書。

土倉政

談話^{〔話〕}

就業日

一月(二十一日) 十二日) 二月(廿日) 三月(二十三日)

試業日

(復修日三月廿日ヨリ二十四日迄) 試験三月二十七日英学廿八日ヨリ三十日迄日本学。

第六組

楠岡為世

日本地誌略二、三、四、

平橋せい

算術乘法

福寫かね

習字

松田喜多

談話

第七組

井上かね

読本一、二初

藤久藤世

書取

吉本梅

習字楷書

中谷常

問答

土倉お糸

算術加法

土倉小糸

作問栄

吉田すわ○

(研究) 生徒ヲシテ己ノカヲ用キテ之ヲ研究せしむべし(一)字引ニ由テ研究せしむべし(二)己レノ考ヘヲ以テ研究せしむべし(三)本ニ由テスベシ(四)疑問或ハ如何ニ研究スルモ悟リ得ざることハ各々帳面ニ其疑問ヲ控ヘシメ置キ一組ヲ一処ニ於テ研究せしめ時間ヲ定メテ互ニ其疑問ヲ(或ハ不知字)出シ各生ノ中其問ヲ知りシ者ハ手ヲ挙ゲテ之ヲ説明せしむべし而シテ悉く知らざる疑問あらば其等のみ教師全生ノ又一同ヘ説明すべし是れ生徒ヲシテ己ノ心ヲ深く用ゐしめ且つ教師ノ時をばぶく為なり。

(算術) 算術ノ凡ての組ヲ二大区ニ區別し各区隔日ニ試験スベシ是れ多ノ煩勞を省くべし而して当日ノ問題ト方法ハ前日ニ定め置くべし

(算ノ問題) 算術ハ実地ニナさしめ常ニ之ニ由テ智慧ヲ研かしむべし故ニ前ニ生徒ノ日々見日々可知事ヲ自ラ問題ヲ作らしめ之ヲ考へしめて算用せしむべし譬へハ各生ニ己レノ内ノ人員ト食料トヲ調べ

「問題ハ生徒をして順番ニ書かしむ可し」

来らしめ之ヲ各々ノ問題として各々己ニ属スル算用ヲなさしむべし。

(暗算) ハ教師問題ヲ塗板ニ書き置き各生ヲシテ手ニ只一寸四角ノ紙片(問題ノ数程)ヲ持たしめ其ノ答ヲ紙片ニ書かしめ可置処ニ置かしめ後ち教師之ヲ視て点を附すべし。

(奨励) 生徒ハ凡て日々私ヲ捨て更ニ隠ル、行或ハ偽リノ処行なからしめ平生真の勉強ヲなし真ノ智慧ヲ研かざれば大試業之時或ハ実地事ニ望ンデ其業ヲなすこと能はざるを示し常ニ自らなさんとすの志ヲ以て勉強せしむべし譬へバ人ノ答ハ如何ニ見ること得ても之ヲ見て己の答トなすが如き心底ヲ打捨てしめ自ら困苦を嘗めて凡ての業をなさしむべし

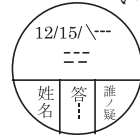
(算術) 問題ヲ出し生徒ニ各番ニ書せしめ帳面に控へしめ其問題ノ意味を深く考へしめ之ヲ悟り得ざる処ヲ問答之時間ニ生徒互ニ問ひ若し生徒中知らざる処ハ教師ニ問はしむべし而して為様も自ら如何ニしても能はざる処ハ教師ノ導きを乞ふはしめ^(ママ)全生一同ニ説明すべし若し生徒ノ中知る者あらば其生徒をして之を説明すべし

(算ノ塗板書クコト) 塗板ニ可成小く書かしむべし又己レノ為ス所ハ上図ノ如く書かしめ他人ノ誤リヲ発見スルトキ其番号ヲ視て己レノ場所ニ帰ヘリ之ヲ為しし図ノ如く之を書すべし

(最下ノ組算術) ハ問題ヲ出スニ種類ヲ別ち一種ハ金ノコトニ付テ一種ハ食物ニ付テ一ハ器械ニ付テ等の種類ニ従ひて問題ヲ作ラバ大ニ便利となるべし故ニ算術帳ニ可教課目ヲ順序ニ認メ置き一期中ニ分配し順々ニ之ヲ教ヘ行かば大ニ便利なるべし(コノ順序ハ凡ての組ニも便利なるべし)

(上等級算術) ノ組ハ帳面の付け方會計ノ為様衣服ノ買方等家政ニ付ての問題を出し算用せしむべし

姓名	答……
	除第何番 $12/15/ \dots$



(下等級の算術) 厚紙ヲ以テ銭ヲ作り之ヲ用ゐて種々の算用せしむべし譬へバ日々ニ勉強スルものハ其代として其金を与へ之にて種々の物を交へ或ハ幾何のもうけとなりしやを問ふ等なり。而して勘定帳ヲ作ラシメ日々ノ勘定を付けしめ実地ニ算用せむべし

(時間表) 各生徒ヲシテ界紙ヲ以テ日々ノ万事ノ時間表ヲ作ラシメ其ノ眠ル時間ト食時ト祈ル時ト勉強時間ト運動時間ト働き時間ト家ノ手伝時間トヲ悉く書かしめ教師之ヲ視て其善悪を正し身体ニも智慧ニも品行ニてもよからしむべし。

(作文第三組) 翻訳課ヲ学バシメ作文体書状体俗語体三体ニテ語ヲ綴らしむることををしゆべし。

(倦) 人ハ事或ハ人ニアキ易きものなれば教育者よろしく此処ニ注意し幼稚の時より忍耐ノ性質ヲ育つべし。

(文章) 教師ノ話其他度々之ヲ書取らしめて常ニ己ノ実験等直ニ記載シ得ルヨウニ導くべし。或ハ実験ヲ記載セシムべし。種々ノコトヲ帳面ニ書取ラシムベシコレ筆ノ活用スル本ナリ。

(心理ノ研究) 朝十分時間ニ寄宿生大ニ説明し置き通学生へハ寄宿生ヨリ説明セシムベシ。

(生理ノ研究) 九時ヨリ九時半迄互ニ研究スルヲ免ス其方其中一人不審ノ字ヲ教員ニ出し置き(午後四時)夜中教員之ニ仮名ヲ附ケ置くべし。而して其三十分時ニ各々各番ニ四五行宛先づ讀ミ次ニ講ジ其節意義ノ不審を互ニ研究すべし。而して全生ノ不審を教員ニ問はしむべし。其法一人代理トシテ教

員ニ来ルヲ免ス其外己レノ場ヨリ立歩クヲ禁ズ

(算術)ノ時塗板ニ書きしのち他人ノヲ視其誤リヲ正し後ち直ニ己レノ席ニ歸るべし其節決シテ互ニ談話スルヲ禁ズ又諸器械或ハ入用品ヲ失忘スル者ハ罰点ヲ附スベシ。

(書状)ノ時間モ勝手ニ立つ可らず

(万国地ノ研究)九時三十分ヨリ三十分間大地図ニ就テ互ニ問答スルヲ免スベシ其節全生ノ不審ヲ安田才ニ問フベシ。

(諸等数ノ研究)第一其時間ニ問答ヲ写シ次ニ各生ヲシテ順々ニ読マシメ若し知ラザル字アラバ仮名ヲ附クべし而シテ全生ノ不知字ハ一人代理トシテ教員ニ問フベシ(但シ不審ハ帳ニ控ヘ一度ニ凡ての問ヲ問はしむべし)次ニ意味ヲ順々ニ云フベシ若し不審あらば読む時の如くすべし。而シテ問答ノ分解ニ究するトキハ其時間ニ教員ニ問ふ可し。

(四則、乘法ハ)諸等数ニ等し

○凡テ塗板ノ試業済まば直ニ席ニ歸るべし。

順 席

鈴木兼

土倉政

安田才

藤久藤世

竹田とく

平川千きを

森田房

北住梅

江頭秀

河本虎

清水秀

荒木ヤス

北住春
前神松枝
杉田真
大井松枝
村田よし
梶奈良絵
橋平米
橋平せい
土倉富
土倉大糸
土屋政江
石田雪
古木みつ
楠岡為世
館清
土倉小糸

森田朝
福寫かね
山口照
作間栄
山木清寿
岡田米
松田きた
井上かね
中谷常
村田高

伊藤鉄
池田春
楠岡菊世
土岐幾の
大石睦世
上代よし

掃 除 番

(1) 杉田真	森田朝	江頭秀	井大岡
(2) 森田房	山口テル	前神松	田池
			平橋
			北
			河
			土
			井

(1)

(2)

(1)

(2)

○(自助) 多くの組ヲ一人ノ教師ニテ教ゆれ僅ノ弊害あれば常ニ其法方よく定むれば損より益多し即ち

大ニ実地ノ学活用之学問己れノ実智得るなり。

(就眠規則) 就眠之報ありし後ち祈禱と衣服之事之外談話するを禁ず又疾走或ハ互ニたわむる等之処行ある可らず之ニ背くものは罰点を付すべし凡て夜中を主るものハ鈴木かね北住春安田才中寫親子となす

(励之法方) 教師己レノ試業或ハ教授方のみをよくするニ注意せず生徒の内ニ於て或ハ己レノ意ニ於て如何ニ勉強するか如何なる方法ニてなすやを深くしらば生徒ノ身体、心、腦ニ尤も適當尤も進む可きしかたをさづけ或ハ励して己ニて勉強する道を明ニ示し常ニ自ら尤もよき方法を以て勉強せしむ可

し。故ニ時ニ教師よく研究せし生徒ニ如何ニして如何なる方法を以て勉強せしかを問ひまた不勉強なるものニは如何なる心を以て如何なる方法を以て勉強せしか問ひ生徒の自ら為す方法有様を教師ハ明ニ知る可きなり而し〔て〕よく、方法を知らざるもの方法を誤るものハねんごろニ其道を諭すべし。
(勉強) スルトキハ他人ノ居る所ヲサケ可成密なる所ヲ選ぶべし是れ勉強ニ注意す可き為めなりまた人ノ談話を耳ヨリ防くべし。

○ (智識ノ取方) 生徒自ら成シ得る事ハ何ニ限らず自ら種々ノコトヲなさしむ可し
親たる者子女ノ勉強時間ニ其場処ニ於て客或ハ家内中談話す可らず是れ子弟ノ大なる妨げなり

如何となれば真の智識ヲ得る事又彼等の愉快なる事又教師ノ助トナルコト多ければなりたとへばコノ三冊ヲコノ一期ニ終へんとするや生徒然リト答ふ然れば毎日幾何之進歩を要するやを問ひ彼等自ら之ヲ算せしむべし又コノ本ヲ自ら研究するに知らざる字知らざる事あらば如何なる方を用ゐばよきやの問題を出し可成生徒ニ自ら其方ヲ取らしむべし教師ノミ之ヲ考ふ可らず又算術ノ問題ヲ作ラシムベシ又規則ニても時ニ如何すべしか生徒ニ問ひて其注意をなさしむべし又研究法等ヲ問ひて生徒ニ答ヘヲナサシムベシ。又汝等何をなしたなら一番愉快なると思ふやと問ふべし又時ニ各々ヲシテ各々之研究法等を唱さしむ可し。又明日何処まで学び度か先づ生徒ニ問ひ後ち教師其正誤を云ふべし又作文ノ日限ノ如き何日まで作り得るや自らニ定めしむべし後教師之が助言を云ふ可し。又教場乱るとき教師生徒ニ問ひ如何ニなせば整はんや汝等明日まで考へテ答あらん事を乞と云ひ置き明日其答ヲ聞くべし。
○ (文章) 七幼女ヲシテ度々自ら咄ヲ作らしめて之を塗板ニ綴らしむべし又可笑咄を書かしむべし毎

日教場之面白きを主とすべし

次(六) 自分ノ国或ハ今在町或道などの図ヲ書かしめ或ハ文ヲ綴らしむべし

(五) 万国地ノ組ハ(エハ) 組ノ如きことまた世界ノ比較等或ハ面白きこと等ニ付て文ヲ綴らしむべし
毎月一度宛書状を書かしむべし

○最下ノ組 五十音

試業

(一)読方(二)読方ノ拔書(三)塗板へ書かしむ事(四)単語ヲ綴り読ましむる事

右之諸法ヲ以テ試ミ全きものには賞トシテ新聞ノ画ヲ与フベシ

○授業法

(一)読ましめ(二)拔書(三)石盤へ書かしめ(四)種々不順序ニ書きし本ヲ以テ読ましめ(五)本ヲ以テ其中ニアル某五十音ニ紅唐紙ニテ記号を記さしめ(六)カルタニ書かしめ(七)カルタニテ其字ヲ選らしむ等なり

○書取

(一)教師物ノ名ヲ呼び生徒ヲシテ本ノ中より求めしめ之ヲ綴るよう導くべし(二)教師其正誤を正すべし(三)後ち帳面ニ記さしむべし(四)明日まで幾度もけいこなさしむべし

○習字



(代数)

明治十五年四月ヨリ

日数 四月十五日 五月廿三日 六月十二日

就業日総計 五十日

復修日 十日

試業日 四日

自六月十九日至同三十日 復修日 自七月二日至五日 試業日

1 5
1 2 3
2 5 0

○同月五日より三週間復修日 自廿六日至二十九日定期試業ナリ。

第壹ノ組

心理学 五百五十ページ日本紙員二百七十五枚之ヲ五十日ニ除せば毎日五枚半宛ナリ。

代数 百四十九ページ之ヲ五十日ニ除せば毎日三ページ日本之紙員ニして一枚半宛ナリ

英学 (Animal and water and air)

文章

縫裁

鈴木かね、北住春、安田才、杉田真

(復三週)

毎日
一週二度

第二ノ組

二週間

化学 卷五迄 二百十枚ニして之を四十日ニ除シ毎日五枚四分ノ一

同 毎月十日

生理学 五十枚ニして毎日五枚宛ニして十日

算術 開平、開立、開平迄

一週間三度

書状、作文、

縫裁

一週間

修身学

(字)

○作文ハ宿題並ニ即席

第三ノ組

二週間

生理学 毎日五枚ニして十日

物理学 二百七十八ページ日本ノ紙員百四十九枚故ニ之ヲ四十日ニ除シ毎日三枚ト四十分ノ二十九

一週間

算術、分数、四則(比例迄)

書状、作文、

○ 縫裁

(字)

○ 問題ヲ書く事をも修業し置くべし

二週間

第四ノ組

日本略史 二ノ卷

万国略史 卷ノ一、二、

算術 諸等雜題、分数初歩

書状

縫裁

習字

(字)

二週間

第五ノ組

万国地誌略 卷ノ二半 卷ノ三全

日本略史 卷ノ一

算術 諸等数命法

書状

縫裁

習字

(字)

河村、土倉政、幾の、高、池田

第六ノ組

(三週間)

小学読本卷ノ五

算術 加減乗ノ雜問並ニ除法

習字、作文、

縫裁

(字)

○ 字引を引く道を教ゆべし

福罵、楠岡、松田、石田、

第七ノ組

(三週間)

小学読本卷ノ二ト三

算術加法

習字、作文、書取、

(字)

縫裁

第八ノ組

(二週)

単語、連語、

(字)

書取、作文、習字

算術百迄書方、書取、加へ方、

(算術) 算術之試業ハ末期ニ於て前ニ学びし題ト新たなる題を出せば日々ニ算術書之問題規則等と又実地ニ問題を学ばしむ可し然リ而シテ一問ニても若し十分ニ理會せざる処あらば生徒之ヲ悟るまでハ当日帰校せしめず必ず理會するまでニ至るべし

(本) 本ハ口ニて問ふと雖ドモ又問題を出し紙ニ其答を書かしむ可し故ニ其用意を為さしむべし

○本ニても算ニても十全ニ研究するを要せば少しも残す処無く悉く明に学ばしむ可し。

○授業法 第一ノ組

教師毎夜六 ○(心理学) 毎日問題ト字ノ味義を記し生徒ニ渡し置き自ら研究せしむ可し○書く事をもなすべし

時皆出勤ス ○(代数) 生徒自ら研究し十時半より試業す可し但シ全生ノ知ラザルコトハ過失点ヲ符ケズ

ベシ其時尋 ○(文章) 文章ヲ書き其文法等ハ悉く酒井先生ニ托す可し而して成瀬ハ一週ニ二度宛組織考へ方等ニ付問すべし
て演舌し且つ生徒ノ文章ノ評す可し

第二ノ組

尋問法如何 (生理学) (一)研究ハ自ら之ヲなし不知事ハ疑問時間ニ教師或ハ互ニ尋問すべし

ニすべき又 (二)試業するときハ教師問題を出しもし不知者あるときハ自ら塗板ニ行き失点をつく可し而して過失場

其時を如何

ニ居る可し

(化学) (一)自ら研究もし不審あらば尋問時間二問ふ可し

(二)試方ハ生理ニ等し

(三)試験(実地) ハ重ニ生徒ニ其器械藥品等を備へしめ又其時試業す可し。叙述せしむ可し

四而して役ヲ定メ置くべし譬へば誰ハ器械誰ハ藥品誰ハ會計トノ如くして之ヲなさしむべし

(五) 前日より誰ハ何ノ試験ト定め用意せしむ可し然れハ面白く研究す可し。

(算術) ハ筆算教授書を以て之を教ゆ可し。

算術も研究ハ自らニ任セ毎日三十分宛試業を行ふ可し

第三ノ組

(物理学) ハ他学ニ等し

其他学課教授方前級ニ等し

第四の組

前級ニ等し

(書状) 右之組ノ書状ハ酒井氏ニ依頼し婦女子ノ書く可き文体ニて文章を書き之を各ニ与へて習字をなさ

しめまた之を塗板ニ書せしめ字ノ修業と其文体之文法を教ゆ可し

(時間) 尋問時間ハ業ノ終リシ後三十分時間とす可し若し其時ニあらざるものハ自ら適宜之時ニ自ら尋問

すべし) 又互ニ問答する時間として三十分宛を与ふべし但し之ヲナストナサルハ生徒ノ自由ニ任ス

ベシ」又其場所ト時間ヲ定メ決して猥リナルコトヲナサシムル可らず先づ当分食堂トスベシ。

(尋問ノ方) 尋問ノ時間は生徒一同一処ニ集め問を出さしめ教師之を生徒ニ正し若し知る者あらば彼ニ之を説明せしむべし若し全生之を知らざれば教師之を説明す可し而して其答弁ハ悉く帳面ニ筆記せしむべし

第四ノ組

(本) ハ字引にて調べ酒井氏之を試業すべし

(算術) 四人ノ中

書状(一)習字(二)語(三)単題等にて教ゆべし

第五ノ組

(本) 前級二等し

(算) 四人ノ中ニ托ス

(書状) 前級ニ同し

第六ノ組

(本) 前級二等し

(算術) 成瀬

習字、作文、前期二等し

第七ノ組

(本) 試業成瀬。研究安田才二托ス

(書取、作文、習字) 前期二等し

第八ノ組

(單語、連語)

研究
(毎日一時間) (一) 実物トかなと支那字を教ゆる事(二) 帳面ニかなと本文字を書取らしむる事(三) 支那文字ノミヲ石板ニ書かしめ後ち其帳面を教師の手ニ取り其支那字ニかなを付けしむべし但し其前二幾度もけいこせしめ置くべし是れ自ら支那文字の読方を覚ゆる為なり

四帳面よりかなのみを石板ニ書せしめ後帳面を取り其下ニ支那文字を書せしむべし。(常ニ石板ニ書せしむる前ニ一定の線を引かしめ其中ニ書かしむべし是れ一ハ画学ノ為め一ハ字を正しく書する為なり) (五) かなと其本字を各々一紙片ニ書せしむ可し

凡て是等の業を為すハ一人の長女と共ニ座せしめ其善悪是非を調べ当日之業の成就するまで之を果さしむ可し而して成就したるものハ一旦教師ニ告げしむべし

(三十分試業) (一) かなにて綴り読ましむべし(二) 支那文字を読ましめ其実物を問ふ可し(三) カルタヲ取らしむ可し(四) 塗板ニ書せしむ可し(五) 其語と他の生徒の知りたる語を以て面白き語を綴り之を読ましむ可し(五) 其点数を各々の帳面ニ控へしむべし十点のものハ一枚宛画を与へ且つ其賞符を押す可し。若し生徒其点を符する方法を知らず或ハ迂拙なるものニはよく練熟するまで之を学習せしむ可し然り而し

て毎日父母ニ之を見せしむ可し

(書取一時間) (一)研究(い)生徒の知りしもの事或ハ物を教師呼び生徒をして本中より求メ真体ニて綴らしむ可し次ニ学体次ニ変体ニて綴らしめ長女之を見て是非を正し後帳面ニ控へ教師ニ持来らしむべし而して明日まで二明ニ覚へ置かしむ可し。(二)短き面白き談を塗板ニ書き後帳面ニ書せしめ長女ニ見せしむ可し(三)少し練熟之後ハ教師其談をなし置き生徒をして自ら本中より求め之を綴らしむ可し(四)然る後幾度も之を書き或ハ帳を閉ぢて書きよく覚へし後自ら之を書き得るニ至らば其控帳を長女ニ渡しよく自ら書き得るニ至て止むべし

(書取試業三十分) (一)塗板ニ行き昨日之処を塗板ニ書かしめ自分の姓名を書せしむ可し後ち点を与ふ可し

(習字一時間) (一)教師塗板ニ手本を書き書き方ト字の読方を教ゆ可し。然り而して字の読方を覚えし後ハ習字の前ニ於て一度読ましめて習字を初む可し

(二)石板ニ書せしめ幾度も習□其書方を覚えしむ可し(三)半紙或ハ古紙ニ生徒をして縦横の線を引かしめ(但シ之ハ画学の時間ニなざしむべし)其中ニ紙員ヲ定めて書せしむべし教師其書方を常ニ注意して正すべし(三)塗板ニ書かしめ手本なく自ら書き得るものハ運動場ニ出すべし

(習字試業) ハ前期ニ定めし事ニ等し。

(算術一時間) 四人ノ中ニ任スベし

(一)実物ヲ以テ算ふ事を教ゆべし其方を用ゐる時々内ノ人員やた、みかづや障子員をかぞへ教師ニ報ぜ

(七)カルタニ
数字を書し
め是ヲ読ま
しむべし

しむ可し其他学校或ハ外ニ於て実数を算へしむ可し(二)実数の加減ヲ教ゆべし譬へば十ト十八幾つ或ハ
コノ人員ニコノ三人が入レハ幾何等なり(三)実数をかぞへ之を石板ニ書かしむべし(可成愉快なる為め
に遊戯ノ如き事をなさしむ可し) 四教師当日ニ可教数を塗板ニ書き之を帳面ニ書かしむべし然る後幾
度もけいこせしむべし(五)帳面を長女ニ渡し自ら書かしむべし然る後自由ニ書くニ至らば止むべし(六)其
かずニ似たる数をかなにて綴り数字ニ書かしむべし

(算術試業) 授業ヲ反復スベシ又其二似たる数を試む可し

(行状) 教師の命ニ背き或ハ言語を出せば五分間立たしむべし或ハ其他の罰を与ふ可し。

(画学) (一週一度) 習字或ハ算術の線を引く事角を書かしむる事其他画き易き物形を書せしむ可し

(歌) はコールビー氏ニ托すべし

(遊歩) (二時間毎日) (一)長女をして(第二ノ組ノ者) 体操術を教ゆ可し(二)種々器械を以て運動せしむ
べし其運動方ハ長女等ニ教へしむ可し(三)□砂を以て山或ハ島を作らしむ可し。

○点ノ符け方

点ハ失あるもの自ら塗板ニ書し其組ノ試業済次第其級の中一人を選び直ニ書せしむ可し然る後其帳を
直ニ教師ニ渡す可し業之終ニ望ンデ教師自ら其点帳を調べ組々ノ勉不勉を調べ明日の為に励ます可
し。

○小児の組

三体五十音をカルタニ書かしめ之を覚へしむるために第一之を五十音の順序ニ綴らしめ後ち種々の言語を綴らしむべし追々練熟せばたとへば一字ヲ選を上字トシテ種々の言語を多く綴らしめそ之た種々の方法を以て教ゆ可し

明治十五年六月定期試業

(本) (一)心理学 (二)化学 (三)物理学 (四)生理学 (五)修身論 (六)日本略史 (七)万国略史 (八)万国地 (九)日本略 (十)読本 (十一)読本

二、三、(三)単語

(数学) (一)代数 (二)開平 (三)分数 (四)諸等春 (五)諸等真 (六)除法 (七)加法 安田 (八)数字

(英学) (一)文典第二、動物学、四人□□□□ (二)文典第一 前、村、山、森、上 (三)ローヤル、リーダー、○

平川○高○虎○政女○荒木(四)プリマー 富、清、梅□、幾の、房

(歌) (第一) (第二) (第三)

(作文、習字) (一)文章 (二)作文 (三)作文 (四)作文 (五)習字

廿七日 八半―九聖書一九―十ローヤル 十一―十半 一九―十算百迄

十一―十一算四組 十一―十二分数

午後 一―二開平、代数

二―三習字又書取

三―四音楽

二—三英語第五

廿八日 九—九半單語一九半—十半讀本五

十半—十二日本略史万国地理

午後 一—二日本略史二—二半万国略史

十半—十半修身

九半—十文典

二、半—三、半

三、半—四音楽

廿九日 八—九修身一九—十物理十一—十一生理

十一—十二化学

午後 一—三心理—三—四作文演説

一—三小女作文

心理学問題

(一) 正直ノ觀念ハ何 585

(1) コノ觀念ハ天然ニ出ルヤ或ハ人造ニ出ルヤ

③ 人造(い)教育(ろ)法制

⑥ 天然(い)特別ナル一覚性(ろ)情ノ伴結(一)独智情力(二)同感(は)弁決(は)弁決(第一元)

(二) 正直ヲ認識スル如何 609

(1) 独知ノ性質

(い) 正直ノ認識(ろ)義務ノ觀念(は)功過ノ觀念

⑦ コノ先行ハ靈智ニ本クヤ或ハ情ニ本クヤ

(い) 靈智(ろ)情

(2) 独知ノ権力 620

(い) 独智ノ正キ証拠(ろ)誤リナキ力(は)之ニ由テ貴重ヲ減ズルヤ(に)道德上弁決ノ誤(ほ)其ノ正ト誤ノ差異如何(へ)一致ノ普通ナル如何又其差異ハ何処ニアルヤ(と)独知ハ誤リナキ嚮導力又吾曹何ニ依信スベキヤ(ち)独智ノ誤ハ罪ナラザルヤ

(a) 独知ハ専ラ靈智ナルヤ

(三) 人智ハ禽獸ノ智ト如何ニ異ナルヤ

(い) 禽獸ノ智ヲ研究スル如何

(ろ) 本能ノ定義即チ理法

(1) 衝動ニ由テ発作スル理法

(2) 本ハ原生ニシテ学ビ得ズ又雛ノ智力(鳥、蜂、蟻、獸ノ例)

(3) 境遇ニ拘ハスシテ現ル（犢牛ト海狸ノ例）

(4) 企（即功思）如何（蜂、蜘蛛、ノ例）

(は) 人智ト異ナル所種類ニアルカ将タ度量ニアルカ

(1) 教育(2) 改革進歩(3) 本能ハ境遇ニ適セズ又其反對

(に) 禽獸ニ欠タル能力ハ何カ

答道徳、美妙、学問、文財、論弁又（想像力）

(ほ) 禽獸ノ知覚如何

(へ) 禽獸ノ記性如何

(と) 人ノ禽獸ニ優ルハ何処ニアルヤ

四 睡眠ハ何カ

(い) 意識ノ失忘(ろ) 身ノ管束ヲ失フ(は) 心ノ管束

(a) 身心ノ存在ト働ハ全ク消滅スルヤ

五 夢ハ何カ 683

(い) 其原因第一(ろ) 第二

(は) 吉凶ヲ前兆スルヤ

六 睡遊ハ何ヤ一答説明ト例

(い) 其原因如何

(七) 錯乱セル心意ノ作用如何

(a) (一) 人為ノ発狂 (二) 心用

夢ヨリ如何ニ異ナルヤ

(b) (一) 久時ヲ歴フ有様如何

(二) 互ヲ愈ス方如何

(八) 情ハ心ノ如何ナル勢力カ

(1) 智ト情ノ區別並關係如何

(2) コノ能力如何ニ切要ナルヤ

(3) 如何ナル害アルヤ

(4) 如何ニシテ講習スルヤ

(九) 情ヲ分解せば如何

心 単純ナル情 情 款 欲

本能—理性 一情欲 願望—恐懼

称意 喜 愛意 好欲

不称意 憂 惡意 厭忌

(十) 本能上ノ情緒トハ何ヲ云フヤ

(a) (1)愉快 (2)悒鬱

(b) (1)朋友ノ死ニ於ル憂悶ハ如何

(い) 鬱悒ヨリ異ナル(ろ) 苦ノ初頭(は)之ニ次グ心ノ状(に)深憂

(2) 時間ヲ経テ憂ヲ解クハ如何

(c) (1) 同感ハ何カ

(い) 同感ハ悦ニアリヤ憂ニアリヤ

(わ) 憂ニ同感アルハ何故切要ナルヤ

(ろ) 感動ノ強弱如何又其功用如何

(は) 徳義ノ品性ニ感スルヤ

(に) コノ同感ノ因略ハ何カ

(ほ) 時情ニ投合スル如何

(へ) 同感ハ自愛ニ由テ起ルヤ

(十一) 道理上ノ情緒ハ何カ

(一) 自己優劣ノ観

神ニ比シテ己ヲ捨テヨ (い) 譏ル可キカ (ろ) 何如ナル時罪スベキカ

(二) 笑樂ノ享樂如何

(い) 不恰好(ろ) 驚動、新奇、

(三) 新珍奇異ノ享樂如何

(い) 如何ニ提起セラル、ヤ(ろ) 新奇ノ反動如何

(は) 厭倦ノ功用ハ何カ

(四) 美妙高妙ノ享樂如何

(い) 此ノ情直ニ発するヤ否

(ろ) 美妙ト高妙ノ区別

(は) 美妙ト高妙ハ相伴ハザルカ

(に) 躬行ノ正直ナルニ於テノ自得如何

(ほ) 悖戾ナルニ於テノ悔恨

(二) 情款ノ品性如何

(1) 親族ノ愛

(2) 世人女ヲ愛スルノ愛ト信者ノ女ヲ愛スルノ愛如何ニ異ナルヤ

(十三) 心ノ真面目ヲ悉ク論理ニ照スコトヲ得ルヤ

算術

(一)代数 (二)開平

(一)元数二百五十五個アリ此平方積何程ナルヤ

(二)爰ニ方形ノ銅板アリ其方面二尺二寸ト五分ノ二ナリト云其平方積ハ何程ナルヤ

○ (三)該校ノ間口十三間奥行三間半ナリコノ積ヲ変ゼズシテ方形ニ造ラントセバ間口幾何ナルヤ

○ 四校内ノ地三百二十四坪あり問ふ其方面辺幾間あるヤ

分数

(一)一婦アリ木綿若干尺ヲ買ヒ其ノ三分ノ一ヲ足袋トナシ又其ノ残ノ二分ノ一ヲ手拭トナシタリ然ルニ残り三尺ありし然レバ初め幾何尺ヲ買ひしヤ

(二)或生徒学校ヨリ古郷へ帰りし時第一日其ノ全巨離ノ三分ノ一ヲ旅し次日残路ノ三分ノ二ヲ旅せしに尚ホ五里ヲ余セリト然レバ其全巨離ハ幾何

(三)四組

(下等組) (算へ) (書き方)

本

○ 単語 (一)抜書 (二)カルタ (三)列スルコト

四蝶が桜のはなにとまりました

○ 読本卷ノ三 (一)読方、意味、(二)抜書(三)書く事(四)暗記

○読本五

○日本略史

○修身論

生理学

物理学

化学

心理学

救主

(一) 修身の定則ハ何か

(二) 人之ヲ破ルコトヲ得る也又神モ之ヲ破リ賜フヤ

(三) 知ラズシテ悪事ヲなすは罪カ

(四) 知ラズシテ善ヲナスハ罪カ

(五) 疑ヲ以テ事ヲナスハ如何

(六) 然ラバ愚トナリテ余リ其ノ善惡ヲ調ベズシテ事ヲナシ仮令其事惡事ナリトモ罪ニアラザルヤ

故ニ教ヘザルモ罪ナリ

○凡テノ事信ジテ為セ信仰ナクシテナスハ罪ナリ。

汝ニ如何ニ
シテ其罪免
サル、ヤ

(七) 己ノ為メニ善ヲナスハ真ノ善カ

(八) 己レ知ラザルヲ人ニ問ハズシテ事ヲナセハ如何

本心

(九) 本心トハ何か其例

(十) 如何ニして本心を研くや又問ふ如何ニ害フや

(十一) 苦樂如何

- (一) 修身ノ規則ハ何か
 - (二) 事ヲ行ひし後の規則如何
 - (三) 親の職務ハ如何
 - (四) 親の權ハ如何
 - (五) 人間相互ノ職務ハ如何
 - (六) 精神の自由を妨げ得るものありや
- 生理学
- (一) 水晶体ノ功用ハ何か
 - (二) 遠眼ト近眼ハ何ニ由ルカ
 - (三) 聴クノ理如何
 - (四) 音ノ高低ハ何ニ關スルヤ
 - (五) 耳ノ造構如何
 - (六) 動物ノ發聲如何
 - (七) 人ノ高尚ナル証如何
 - (八) 声音器械ハ如何
 - (九) 各人ノ声ハ何ニ由テ異ナルヤ
 - (十) 毒藥ハ如何ニ貯フベキヤ

(一) 中毒ノ兆ハ如何

(二) 其毒胃ニ入れバ如何ニす可きや

(三) 蝮蛇 (四) 毒虫類

(五) 仮死

物理学

(一) 物理学トハ如何ナル学か

(二) 物ハ凡テ何より成ルヤ

(三) 細分子力トハ如何か

四物ノ形体ハ幾様ノ異態ヲ備る也

(五) 物トハ如何か 又何か

(六) 填充性トハ如何か

(七) 定形性トハ如何か

(八) 釘ト砂糖水ノ礙竄性如何

(九) 無尽性トハ如何か

(十) 習慣性トハ如何か

(十一) 車ト船ト地球ノ例玻璃

(十二) 気孔性トハ如何か

- (四) 引力性トハ何か
 - (五) 粘着性トハ何か
 - (六) 運動トハ何か 又独立ト比較
 - (七) 静止
 - (八) 速力の規則
 - (九) 運動の種類を分けて幾何トナスヤ之ヲ各々説明せよ
 - (十) 運動力トハ何か
- 例
- (十一) 撃力トハ何か
 - (十二) 運動ノ三大則ノ第一ハ何か
 - (十三) 摩擦 (十四) 遠心力、求心力

化学

解題

片桐芳雄

本資料は、前半部を欠いた寄宿生の指導に関する記述につき「明治十五年四月ヨリ」とあるので、一八八二（明治一五）年四月以前から、遅くとも成瀬仁蔵が梅花女学校教員を辞職する同年八月までに作成されたものと思われる。内容は、寄宿生の指導方法や教育方針、各学年の教科目や生徒名、教科指導の具体的方法、さらには定期試験の問題や試験方法等、梅花女学校の教育状況を知ることができる貴重な資料である。

梅花女学校は、一八七八（明治一一）年一月一八日、大阪府の設置認可を受け正式に設立された。それに先立つ一月七日の開校式で、成瀬仁蔵は設立の辞を述べた。創設の中心は澤山保羅であったが、学校運営のほとんどが成瀬仁蔵に任された。

成瀬は、一八八二年八月二六日、学校運営の独立自給主義をめぐる意見対立で教員を辞職したが、本資料は、その直前まで、成瀬が熱心に教育活動を行っていたことを示している。

最初の寄宿生に関する資料では、生徒が互いに「品行」について語り合う「問答会」、子ども連れで寄宿している生

徒がいたことをうかがわせる「寄宿ノ小児ニ就テ」の項、聖書を毎朝暗記させていたことなど、寄宿舎生活の実情を垣間見ることが出来る。また「吾等ハ学校を神ノ家となし」との表現も見える。

泣く生徒の指導法、生徒同士のトラブルへの対応法、教師の命令に背いた場合の「罰点」のつけ方等、生徒への細やかな心遣いとともに、厳しい指導のあり方もうかがわせる。「故ニ諸生徒たちよ、余ハ万事汝等の品行二目を注ぎ勸めるゆへ、之を厭ふこと勿れ」と、成瀬は、自らの指導法への想いを記している。

「明治十五年四月ヨリ」とある箇所からは、具体的な授業方法や試験法について書かれている。

まず「研究」の項に「生徒ヲシテ己ノ力ヲ用キテ之ヲ研究せしむべし」などとあるのが注目される。「智識ノ取方」という項でも「生徒自ら成シ得る事ハ、何ニ限らず自ら種々ノコトヲなさしむ可し」とある。算術の問題も生徒自らに作らせ、作文の締切日も生徒自らに決めさせる。これは生徒の主体性を生かし、生徒自らが「愉快なと思ふ」ことを期待するからである。文章指導でも、生徒自身に話を作らせ、これを「塗板」（黒板）に綴らせる。「毎日教場之面白きを主とす」ることを目指したのである。

とりわけ最下級生の第八組の指導には、さまざまな工夫がなされている。文字指導ではカルタを活用し、数の数え方では、家の畳や障子の数を数えさせた。また「可成愉快なるために遊戯ノ如き事」をした。試験で成績の良かった者には、褒美として絵を与えた。算術の初歩では、厚紙で作った「銭」を図で示し、これを使いながら教える工夫もした。

このような工夫は、生徒たちの日常生活と教育内容を結び付けることによって、生徒の主体性を引き出そうとする試みでもあった。

こうした様々な工夫は、多くの組を、ほとんど一人で担当しなければならぬ、困難な事情に対応したものである。また、

成瀬は「自助」の項に、「多くの組ヲ一人ノ教師ニテ教ゆれ僅ノ弊害あれ共、常ニ其方法（たづな）よく定むれば損より益多し。即ち大ニ実地ノ学活用し、学問己レノ実智得るなり。」と記した。悪条件を、逆に、前向きにとらえようとする、いかにも成瀬らしい積極的な姿勢であった。

この方法は同時に、澤山保羅の伝記 *A Modern Paul in Japan* (新井明訳『澤山保羅—現代日本のパウロ—』日本女子大学、二〇〇一年) で述べたように、メリー・ライオンが創設したマウント・ホリヨーク女子セミナーの教育方法を範にしたものでもあった。のちに日本女子大学の教育方法となった「自学自動」教育の源が、すでにここに胚胎していたことは注目すべきである。

全部で八組(あるいは七組)の授業を、成瀬一人で担当することは困難であったので、上級生に授業や試験の手伝いをさせた。「長女」とあるのは上級生のことであろう。とりわけ最上級生の安田サイ(「安田才」)が頼りにされたようである。また「酒井氏」は酒井貞躬、歌担当の「コールビー氏」とは、女学校内に居住していた女性宣教師である。この資料から、この時期の梅花女学校の生徒数がほぼ四五名であったことが判明する。上級から第一組五名、第二組一五名、第三組〇名、第四組八名、第五組五名、第六組四名、第七組八名の合計四五名であるが、この数字は、あとに出てくる「席順」の生徒数四四名とは食い違う。生徒名にも一致しないところがあり、一〜二名の生徒の出入りがあったものと思われる。

組編制は、上記箇所では七組制で、第三組に生徒がいないのは、第二組に合併して授業をしたためであろう。但し、

のちの箇所では八組制になっている。

生徒名では、『成瀬先生追懷録』（桜楓会出版部、一九二八年）に文章を寄せている山岡はる子（「北住春」とその妹梅、土倉庄三郎の娘、長女富子、次女政子、三女糸、四女小糸、土倉が連れてきた親戚の二人の娘、作間栄（佐久間菊）、館せいなどの名前が確認できる。前神松枝とあるのは、成瀬が大変世話になった前神醇一の娘である。また上代かしろよし（淑）は、牧師上代知新の娘で卒業後、山陽英和女学校に赴任し同校長を五一年間務めた。なお安田サイは、のちに澤山保羅の後任として浪花教会牧師となった亀山昇と結婚した。

資料の最後には試験問題が記されている。六月の定期試験のために準備されたものであろう。

心理学の問題は、ジョセフ・ヘヴン著（西周訳）『奚般氏著・心理学』（文部省、一八七八年）に依拠している。この教科書は明治維新後最初に翻訳された心理学教科書として広く利用された。もともとこの書の原題は *Mental philosophy: including the intellect, sensibilities, and will*（「知・情・意を含む精神哲学」）であって、今日一般に言う「心理学」*psychology* ではない。したがって内容も道徳哲学的なものである。

ちなみにジョセフ・ヘヴン Joseph Haven（一八一六—一八七四）は、アメリカの神学者で哲学者である。アンドーバー神学校で学んだことがあるというから、成瀬とも縁があったわけである。

つぎに算術の応用問題が出てくる。対象とする組が不明なので、難易は、にわかには決しがたいが「一婦アリ、木綿若干尺ヲ買ヒ、其ノ三分ノ一ヲ足袋トナシ、又其ノ残ノ二分ノ一ヲ手拭トナシタリ、然ルニ残り三尺ありし、然レバ初め幾何尺ヲ買ひしや」といった問題は、いかにも女学校らしい試験問題である。

修身、生理学に続いて、物理学の試験問題が記されている。これは片山淳吉編『物理階梯』（文部省、一八七六年）

に依拠している。「填充性」「礙竄性」「無盡性」など今日使われない語が出てくるが、すべて『物理階梯』のものである。

梅花女学校の教育状況について、『成瀬先生傳』（桜楓会出版部、一九二八年）は、「外国人教師は英語音楽（その一人は初めレヴィット氏で、音楽を教へたといふ）を教へ、澤山氏が基督教の講義をした外、普通学は初めの間全部先生の担当であつた」と記し（五六―五七頁）、成瀬自身も「私ハ一人デ五ツノ組ヲ担当シテ居リマシタ。其時ニハ倫理ハ無論ノ事、代数モ幾何モ物理モ化学モ心理学モ一切一人デ教ヘテ居リマシタ」と回想しているが（ペスタロッチ氏ノ続キ）一九〇五年一月一四日『実践倫理講話筆記・明治三十七・三十八年度ノ部』日本女子大学成瀬記念館、二〇〇九年）、本資料によって、これが、ほぼ事実であることが確認できる。

また、山岡はる子も『成瀬先生追懷録』のなかで、「経済上他の教師を聘する事が出来ませんから上級生に手伝はしめ、国語、科学等は全部先生お一人にて引受けられ」、「お一人故教程を同時に教授せねばならず、此の組に数学を教へ題を与へおきては、彼の組に心理を講義せられ、此の組に作文を教へおきては彼の組に物理或は教育論を教へらるゝなど」（八四―八五頁）と、生徒の立場から、教師成瀬の教授方法を具体的に述べているが、これもまた本資料の記述と符合する。

さらに『成瀬先生傳』に、以下の記述がある。冒頭の「或る人」とは誰のことかは不明だが、その人物が保存していた「当時の日誌」とは、本資料のことであろう。本資料の、的確な解説になっているので、参考のため引用しておきたい。

「或る人の手許に保存された当時の日誌を見ると、この時の教育に関する方針、方法、学科及び取扱ひ方、試業法及び

問題、寮舎の管理、生徒名（或る一時の）などが、ほんの心覚えではあるが、かなり精しく記されてある。その当時、いかに綿密な注意を以て、いかに熱心に従事してゐたか、之に依つて推察される。先生の教育法は、当時既に大に自発自学的で、而して全く生徒本位であつた。生徒の希望をきき、規則も生徒に考へさせ、日課の進程も生徒にきめさせる。而してその勉強法も各自の工夫を教師が訂正して、自ら研究させ、生徒が疑問を解くことのできない場合に、始めて教師の説明を与へるといふ方針であつた。教室内などの乱れたときは、之を直ちに叱責したりする代りに、生徒各自の研究問題として、どうすれば静肅に整頓されるかを、時を与へて考へさせる。総て罪を責めるよりも、改める道を示すといふ風であつた。一週一回問答会といふものを開いて、各自に実践修養上の問題を出させ、生徒間の解答の不足を教師が補ふといふ方法もとつてゐた。一方には罰点の制などを設けて、かなり嚴重に怠惰と自恣とを戒めたのであるが、其の本旨は全く自発的研究的で、従つて当時としては甚だ斬新な、デモクラチックなものであつたのである。」（五九―六〇頁）

成瀬仁蔵資料集1 (D266)

梅花女学校教師時代の覚え書 明治一五年

二〇一八年三月四日 発行

翻刻・解題 片桐芳雄

編集・発行 日本女子大学成瀬記念館©2018

〒112-8681

東京都文京区目白台二一八一

制作 開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町三二一六一四

※無断転載・複製はご遠慮ください

